

「第40回全国高校生読書体験記コンクール」の中央入賞者の皆さん、受賞おめでとうございます。

今回は44校から、76、000編近くの応募作品がありました。

全国の高校生、先生、各地の新聞社の方々、選考にあたられましたすべての皆様に厚くお礼申し上げます。

いま私たちの日常は新型コロナウイルスの感染拡大の影響で、生きる上で大切な、人との対話や集まりや移動が大きく制限され、これまでの暮らし方が大きく変わることとなりました。

今年度は受賞者を囲んでの晴れやかな表彰式も残念ながら中止いたしました。

このコンクールは、高校生に、自分の読書体験を綴っていただくことによって、自分の人生と読書のかかわりをあらためて見なおし、読書の喜びと楽しみを深めていただくものです。

一冊の本との出会いが、さまざまな生き方や考えを知り、人間のぬくもりや希望を発見することにつながり、豊かな人生を歩む力になることを願っています。

公益財団法人 一ツ橋文芸教育振興会

理事長 堀内丸恵

作品名をクリックすると作品に移動します。

目次

中央入賞者発表	1
「第40回全国高校生読書体験記コンクール」について	2
文部科学大臣賞	4
世界にゆさぶりをかけるもの 賀井暁月	4
全国高等学校長協会賞	6
生と死 山崎陽大	6
和歌に愛をこめて 森谷鈴音	8
一ツ橋文芸教育振興会賞	10
拝啓、銀河鉄道に乗る母へ 佐藤万葉	10
私も、あなたも、彼らも 石川李津	12
世界のこと 横井菜々	14
とらわれないこと 戸田ゆあ	16
添加物から考える「食」の豊かさ 酒井菜摘	18
中央選考委員選評	20
辻原登／穂村弘／角田光代／長尾篤志／林達也	20
入賞者一覧	25

一ツ橋文芸教育振興会ホームページ

<http://www.hitotsubashi-bks.jp>

受賞者名をクリックすると作品に移動します。

「全国高校生読書体験記コンクール」中央入賞者発表（敬称略）

【文部科学大臣賞】 宮城県加美農業高等学校 二年

賀井暁月 世界にゆさぶりをかけるもの
（体験書籍『ラヴクラフト全集』H・P・ラヴクラフト
大瀧啓裕 他 訳 東京創元社）

【全国高等学校長協会賞】 千葉県 筑波大学附属
聴覚特別支援学校 三年

山崎陽大 生と死
（体験書籍『生き物の死にざま』稲垣栄洋 草思社）

【全国高等学校長協会賞】 兵庫県立神戸高等学校 二年

森谷鈴音 和歌に愛をこめて
（体験書籍『大江匡房』川口久雄 吉川弘文館）

【一ツ橋文芸教育振興会賞】 岩手県立盛岡第三高等学校 一年

佐藤万葉 拜啓、銀河鉄道に乗る母へ
（体験書籍『新編 銀河鉄道の夜』宮沢賢治 新潮社）

【一ツ橋文芸教育振興会賞】 東京都 学習院女子高等科 二年

石川李津 私も、あなたも、彼らも
（体験書籍『国境なき医師団』を見に行く』いとうせいこう 講談社）

【一ツ橋文芸教育振興会賞】 静岡県 浜松市立高等学校 三年

横井菜々 世界のこと
（体験書籍『蜜蜂と遠雷』恩田陸 幻冬舎）

【一ツ橋文芸教育振興会賞】 鳥取県 青翔開智高等学校 二年

戸田ゆあ とらわれないこと
（体験書籍『ジョーカー・ゲーム』柳広司 KADOKAWA）

【一ツ橋文芸教育振興会賞】 香川県立高松高等学校 二年

酒井菜摘 添加物から考える「食」の豊かさ
（体験書籍『食品の裏側』安部司 東洋経済新報社）

「全国高校生読書体験記コンクール」について

このコンクールは、公益財団法人一ツ橋文芸教育振興会が、文部科学省、全国都道府県教育長協議会、全国高等学校長協会、各地の新聞社、集英社のご後援をいただき、「高校生のための文化講演会」ともに実施している事業です。多くの高校生ができるだけたくさんの本と出会うきっかけをつくることを目的としています。「感想文」を綴るだけにとどまらず、読書によって自分が何に気づき、どのような行動したかをふりかえることが大切であると考え、「読書体験記」といたしました。

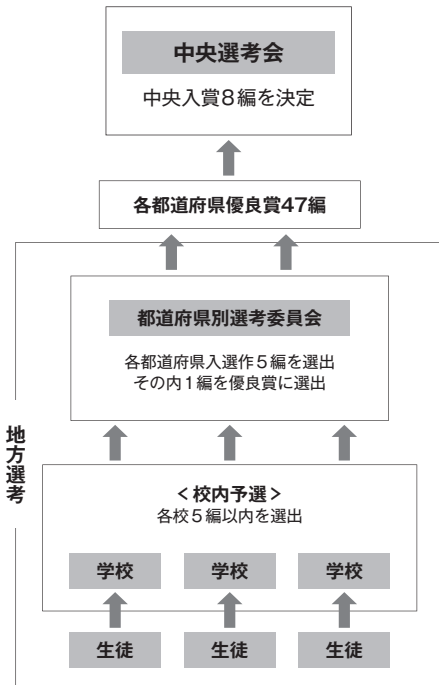
第40回の本年度は、全国47都道府県から440校の参加があり、応募作品は75,973編となりました。

【選考】

- ◎生徒から提出された応募作品は、各学校の校内予選により5編以内が選ばれ、都道府県別の応募先に提出されました。
- ◎その後、都道府県別選考委員会において、「都道府県入選」5編が選ばれ、その中で「優良賞」とされた1編が中央選考会に送られました。

- ◎各都道府県で選ばれた「優良賞」合計47編の中から、中央選考会において、文部科学大臣賞・全国高等学校長協会賞・一ツ橋文芸教育振興会賞の「中央入賞」作品8編が決定しました。

【作品の応募と選考の流れ】



【賞】

中央入賞 8名

- ・文部科学大臣賞 1名 賞状・楯・記念品
 - ・全国高等学校長協会賞 2名 賞状・楯・記念品
 - ・一ツ橋文芸教育振興会賞 5名 賞状・楯・記念品
- *中央入賞者在学の8校には「学校賞」として、楯および「集英社文庫100冊セット」を贈呈します。

優良賞 39名 賞状・記念品

- *優良賞受賞者在学の39校には「学校賞」として「集英社文庫50冊セット」を贈呈します。

入選 186名 賞状・記念品

- *入選者在学校には「学校賞」として「集英社国語辞典」を贈呈します。

【中央選考委員（敬称略）】

- 辻原 登（作家）
- 穂村 弘（歌人）
- 角田光代（作家）
- 長尾篤志（文部科学省初等中等教育局主任視学官）
- 林 達也（全国高等学校長協会）

*中央入賞者表彰式は、2021年1月25日（月）に予定しておりましたが、新型コロナウイルス感染拡大の影響に鑑み、中止いたしました。

【主催】

公益財団法人一ツ橋文芸教育振興会

【後援】

文部科学省・全国都道府県教育長協議会・全国高等学校長協会・集英社

北海道新聞社・東奥日報社・岩手日報社・河北新報社・秋田魁新報社・山形新聞社・福島民報社・上毛新聞社・産経新聞社・神奈川新聞社・山梨日日新聞社・信濃毎日新聞社・新潟日報社・北日本新聞社・北國新聞社・福井新聞社・岐阜新聞社・静岡新聞社・中日新聞社・京都新聞・神戸新聞社・山陰中央新報社・山陽新聞社・中国新聞社・徳島新聞社・四国新聞社・愛媛新聞社・高知新聞社・西日本新聞社・佐賀新聞社・長崎新聞社・熊本日日新聞社・大分合同新聞社・宮崎日日新聞社・南日本新聞社・琉球新報社

【地方主催】

北海道高等学校文化連盟図書専門部・青森県高等学校文化連盟文芸部・岩手県高等学校文化連盟文芸専門部

【文部科学大臣賞】

世界にゆさぶりをかけるもの

宮城県加美農業高等学校 二年

賀井暁月

私の家庭には、暴力があつた。殴る、蹴る等の身体的なものから、言葉や態度で表される精神的な暴力が、物心ついた時から既に身近なものになっていた。昔は、それが現実の全てであり、泣いても喚いても変わることに無いものだと思つていた。

夏休みのある暑い日だった。家にいたくなかつた私は、図書館へ向かつた。元々ホラー小説が好きだった私は、いつもの見慣れたコーナーに足を運ぶ。そこで、強烈な魅力を放つ表紙の小説に惹かれ、手に取つ

た。それが、ラヴクラフトとの出会いだ。そこで直面した絶対的な恐怖に、私は強く惹かれた。

恐怖。と聞いて、私たちが普段想像するものは、暴力だろう。暴力は、情念から発せられ、せいぜい殴られるとか蹴られるとか、或いは（食べ物が与えられない為に）お腹が減る程度のこと、人間の想像の範囲内に留まるから予測でき、対処ができる。また、暴力は常に一方的だ。暴力を与える者の感情が全てを支配するため、そこに他

者が介在する余地がない。だから暴力は醜いのだろう。

しかし、ラヴクラフトの作品に描かれる恐怖は、私のこれまで培ってきた想像力を超えたところにある。同時に、私が主体的に恐怖へ身を投じることが求められる。それ故に、ラヴクラフトの作品が魅せる恐怖は、私という存在と双方向的な関係がある。まるで物語の中で狂気に陥る探索者達のように、見てはいけないもの、見るなど言われたもの、私たちはそのような未知に対し

て誘惑されるのだ。遠足の準備が最も心躍るのと同様に、それが何であるか、或いはどんなに恐ろしいものであったかにせよ、未知が既知になるその時まで、それは誘惑し続ける。この誘惑する恐怖は、暴力には存在しない。

例えば、『マーティン浜辺の恐怖』では次のように描かれる。「天の声が地獄の冒瀆の言辞とともに反響し、亡者すべてのこもごもの苦悶が途方もない大音響となって、星をも砕きそうな終末めいた轟音になつた」。これは巨大生物が、人々を海に引きずり込む場面である。このような人知を超えた未知の恐怖の存在を、私達は想像力で思い描かなければならない。

ラヴクラフトの言葉と、私の想像力との双方向的な関係性の中で、私自身の世界自体が揺さぶられる。この世界は普段見えてくるよりもずっと深く、恐ろしい何者かが支配しているのではないだろうか、と。この想像は、私の世界に大きな変化をもたらした。

私は当初、暴力を行う親族の過ちに気づくことができなかつたし、母に対しては、苛立ちと哀しみの両方を感じるだけだつた。

しかし、私の世界が揺さぶられた時、これまで見えなかつたものが見えるようになっていた。それは、むき出しにされた私自身の欲求だつた。

私は母にかまつて欲しかつた。私のことを見て欲しかつた。褒めて欲しかつた。しかし、それらの欲求は満たされることは無かつた。満たされない欲求を抱え続ける苦しさは、一生付き合つていかなければならないのかもしれない。私にとつて、それは呪いのようなものなのだろう。しかし、その呪いを抱えることは、きっと悪いことだけではないのだからとも思う。というのも、その叶えられることの無かつた欲求は、今は別の欲求へと形を変えているからだ。

私は、自分の言葉を紡ぎ、言葉を通して、他者と関わりたい。なぜなら、その過程で美しいものに出会えると、確信しているからだ。美しいと感じるものとは、世界の方々に揺さぶりをかけるものではないだろうか。他者と言葉を通じて関わることで、私の他者に対する見方や、世界に対する見方が変わっていく。この文章を書いている、今まさにこの瞬間だつてそうなのだ。

他者と関わりたいという私の強い欲求は、

おそらく私の抱える呪い抜きにはありえないものだつたのではないか。だから、私は自らの苦しみを抱えて生きてきたし、これからも生きていくことが出来ると信じられるのだと思う。

暴力はいけない。そう人はよく口にする。しかし、その暴力という恐怖の本質について、私はよく知っている。今なら、その恐ろしさがよくわかる。暴力に耐えてさえいれば、母はいなくならない。そう考えてしまつていた私自身がその暴力に依存してしまい、その環境を受け入れてしまうのだ。こうして、未来が閉ざされてゆく。

私は現在、里親制度を利用してゐる。かつての私を支えていたものがラヴクラフトの作品であつたという強い実感がある。そして、ラヴクラフトの想像力は、かわいそうなだけであつた私に、他者と関わるための言葉という強力な道具と、他者と関わろうとする強い意志を与えてくれたのだ。きっと、未来を切り拓くために。

体験書籍

『ラヴクラフト全集』H・P・ラヴクラフト

大瀧啓裕 他 訳 東京創元社

【全国高等学校校長協会賞】

生と死

『生き物の死にざま』を読み終えた私は、
咄嗟に外に出た。死にざまが一目瞭然の生
き物を自分の目でしっかりと見ておきた
かったからだ。

少し先を歩くと電柱の根元に転がっている
蟬を見かけた。その瞬間、本書に載って
いた蟬の話を思い出した。蟬が死ぬ時は必
ず上を向いて死ぬのだと。まさにその通り、
その蟬は仰向けになっていた。でも本当に
死んでいるのか、と私は目を凝らした。と
は言っても、見るだけでは確認のしようが

ない。そこで、つついてみることにした。
つんつん。すると、羽をバタバタとばたつ
かせた。その様子はまるで重力に抗って気
力を振り絞り、起き上がろうとしているか
のようだった。しかしながらその羽の勢い
は刻々と弱まっていき、やがては命とい
う名を背負ったろうそくが火によってじわじ
わと消えるかのように羽を静かにそっと閉
じた。その有様からして死期が近づいてき
たのだと察知した。今度はつついてみて
も反応はなかった。蟬の最期は本当に呆気な

く即座に訪れたのだ。あつという間に訪れ
る儂い命の最期の瞬間、この蟬は何を思っ
てそして何を見て死んだのだろうか、と私は
思いを巡らせた。地球上のあらゆる場所で
生きている生き物たちの最期はそれぞれ違
うからこそ、ある生き物の視点から異なる
生き物の最期を見るとそれが風変わりな死
にざまのようで、ミステリアスに見えるの
だろうか。なんだか深い沼にハマっている
気分だ。

今思えば幼い頃の私は好奇心が旺盛で様

千葉県 筑波大学附属聴覚特別支援学校 三年

山崎陽大

様な虫を捕まえていた。その中でも蟬が特別にお気に入りだった。連なって立っている木の枝に止まっている蟬にそっと忍び寄って虫取り網で素早くその蟬を捕まえる。こうして捕まえた蟬を観察すると、先述した蟬とは違って元気よく羽をずっとばたつかせていた。そんな蟬でさえも、夏の終わりがごろになると必ずと言っていい程、四方八方に散らばって仰向けになって死んでいる光景が目の前に広がるのだ。当時からずっと、なぜ仰向けになって死ぬのか疑問だった。そう、この本を読む前までは。本によれば仰向けとは言っても、蟬の目は体の背中側についているから、空を見ているわけではない。昆虫の目は小さな目が集まって出来た複眼で広い範囲を見渡すことが出来るが、仰向けになれば彼らの視野の多くは地面の方に広がることになる。もともと、彼らにとつてはその地面こそが幼少期を過ごした懐かしい場所でもあるのだ。なるほど、面白い。現に私が見ている蟬は仰向けになって死んでいる。まさにこの本に書いてあるとおりだ。生き物の最期はただ死ぬだけだという概念を抱えていた私だったが、その「死ぬ」ということは本を読んだ後で

は単純そうに見えて、案外とそうでもないのだと感極まったのである。その感情は、凪いだ海の上に夕日がゆったりと暮れる情景を見ている時に生じる、心が安らぐように落ち着くような気持ちに近かった。なんだか、心の内に穏やかな波がゆっくりと流れるのと同時に心地よいメロディーを乗せたヨットがぶかぶかと浮かんでいるかのようだ。そんなに悪い気分はしなかった。それぞれの生き物にいずれはやってくるであろう「死ぬ」ということは、ただ息絶えるようなものではないということには確かである。たしかに一見、外から見ても何故このように死んだのか、と疑問に思うことによつて腑に落ちない部分を生じてしまうこともあるだろうとは思う。かく言う私もそうだった。何故なら、冒頭にも述べたように蟬が転がって死んでいる様子を見て、私はその死にざまが意味を成すものであると知らなかった故にかわいそうだと感じたからだ。もし、本書に出会えていなかったら私は「死ぬ」ということに対して悲観的な見方ばかりをしていたかもしれない。しかし、今は違々と断言出来る。本書に出会ったことで、「死ぬ」ということは常に悲しいこ

とが付きまとうようなものではなく、その生き物にとつて最期は意味を成すものであるから輝かしくも見えるのだと改めて気づかされたからだ。それぞれの生き物の最期は異なるのだが、その死にざまはその生き物にとつて意味を成すものだということを本書は伝えたかったのではなからうか。そして、これは人間も同じだと言えるのではなからうか。

このように「死ぬ」ということを深く考えたと様々な見方が生じてくる。そして、それとはまた別に「生きる」ということにもまた違った新たな発見が生まれるかもしれない。そう考えると、なんだか新鮮な気持ちで新たな世界に足を踏み込むよう生まれ変わったような気持ちにならないだろうか。

そんなことを考えているうちに時間はあっという間に過ぎ去ってゆく。ああ、こうしているうちにも「死ぬ」というリミットは刻々と迫ってくる。でも、今度の自分は何だか不思議と怖くはなかった。

体験書籍

『生き物の死にざま』稲垣栄洋 草思社

【全国高等学校長協会賞】

和歌に愛をこめて

兵庫県立神戸高等学校 二年

森谷鈴音

幼い頃私は、偉人の伝記が嫌いだった。十歳の自分が書いた感想文を読み返すと、有名な伝記に対し何と一行のみで提出した斬新なものがあつた。

「自分のばかさかげんがわかって苦しくなる」。力強い文字に苦悩が見て取れる。ところが十六歳の今、時代を超えた伝説の人に強く惹かれ、現代に残る彼らのかげらに会いたい一心で動く。特に、平安時代の一等星が私に励ましをくれる。

秋はつるはつかの山のさびしきに
有明の月を誰と見るらむ

この歌に詠まれた羽束山はつつかやまが好きだ。幼い頃近辺の川で泳いで小魚を捕まえたり座って只空を眺めた楽しい思い出の場所。神戸三田線を北上しながら仰ぐと力強く個性的で、北側の木器地区こうづ天柏神社付近からの眺めは優しく一抹の淋しさを感じる。羽束山は天狗伝説も残る古代から多くの歌人が好んだ神宿る山。この歌の詠み手は平安時代屈指の学者大江匡房卿である。私の趣味の史跡巡りや好きな和歌でその名に度々出会ったことで強烈に惹かれた。丹波街道、猪名川街道、能勢街道、古代山陰道など、か

つて賑わった交通の要所は私のテーマパークだ。隙を見ては石碑を探す。蚊に刺され、髪に毛虫を付けて帰宅し笑われても構わない。彼の遺したかけらを探し歩いている。匡房卿の先祖を辿ると日本書記に登場する相撲と学問の神、野見宿禰命のみのとみまで遡る。後に祭祀者一族土師氏はじとして活躍、子孫の中には菅原道真公の名も見られる。特に出世を遂げた大江匡衡は、百人一首で有名な赤染衛門あかぞめの夫であり、匡房卿の曾祖父。そんなエリート一族の中で殊更輝いたのは匡房卿。国への影響力が窺える話がある。あ

る時突如天竺へ行こうと言い出す白河上皇と、安易にイイネと絶賛する役人らを諫め「危険や不都合の多すぎる所へ無理矢理行かずとも我国には京から三日で行ける高野山がある。その聖地を踏まずして何が天竺か」と、上皇の心を改めさせたのだ。現代を生きる私にもこの言葉は刺さった。己の国の歴史や先人の苦労も知らず国について説明できる知識や技術も持たずして国際化はない。己に向き合え、と鋭く言い切られた気分だ。自分はこれからのためと複数の外国語を勉強してきたが、勉強すればするほど心に湧いて出る言葉にしにくい迷いは、既に平安の天才によって一喝されていた。かと言って匡房卿は自国のみを置きっぱなしだったのではない。彼の遺した書の中にはペルシャ語について言及したものがあろうだが、この日本そのもののような人が外国語を操ろうとするその意味に、強大な説得力を感じた。「グローバル」という言葉や表面的な海外滞在がもてはやされた挙げ句、結局今、自国の内側と嫌という程向き合わざるをえなくなった。疫病と戦う今、彼の命がけの言葉は私の心を耕し、志すべき方向を照らした。

しばしば私は史跡にて土地にまつわる歌碑を発見し感動する。匡房卿の歌にも様々な信仰の地が登場するので、そちらを調べたら何か発見できるかとも思い探した。今手にしている本『大江匡房』によると宇佐八幡信仰とある。宇佐と京を繋ぐと言えば石清水八幡。そこで石清水にまつわる資料「石清水八幡宮 護国寺跡 現地説明会資料」を発見、そこでやっと匡房卿の名と出会った。一一〇三年匡房卿が十二神将を寄進したとあり、それらは明治の廃仏毀釈で一旦は男山に打ち捨てられていた。私は男山には様々なルートで五度登ったが、山中に多くの院跡が見られ興味が尽きない。政治や権力者が変わればかつて国を動かした偉人の遺産ですらも、あのような森の中に捨てられてしまうのかと残念で虚しい。しかしその後神託を受けた尼僧が発起人となり、密かに一体ずつ人に背負われて淡路島東山寺に移され、現在も大切に保管されているという。大興奮した。すぐさま東山寺に問い合わせたところ、新型コロナウイルス拡散防止のため現在拝観中止しているそう。歓喜の後に泥沼に落ちた気分であった。何て憎らしいウイルスだ。しかし先

人達も疫病を何度も乗り越えてきたのだ。私も諦めてたまるか。何年先になっても絶対に拝んでやると心に決めた。

匡房卿はこんなことも述べている。「和歌とは国の至宝、倭国の風俗、日本民族の師友。中国の文学形態たる詩賦を借りずに幽玄の興趣や詩的感動をうたい出せるものである」と。形のある仏像は拝めなかったが、遺された大きな贈り物である和歌を目の前にして、学ばないのはあまりにも勿体ない。もっと知りたい。

ところで冒頭に記した匡房卿の歌は、摂津羽束で亡くなった歌友源頼綱へ贈ったのだが、その友の死により読まれることになった歌である。あの羽束の地の寂寥感と、友亡き後の匡房の孤独が胸を打ち、涙を誘う。私も匡房の友となり、一度でもいいからこのような歌をもらってみたい。

体験書籍

『大江匡房』川口久雄 吉川弘文館

【一ツ橋文芸教育振興会賞】

拝啓、銀河鉄道に乗る母へ

岩手県立盛岡第三高等学校 一年

佐藤万葉

「なぜ」という疑問が脳裏に焼きついて離れなかった。その日は、至って普通の朝だったと思う。当たり前のようにご飯が美味しく、学校での出来事を面白おかしく家族に話せば、それでもういつもの今日は終わりを迎える筈だった。「乳ガンになった」と母が私に告げた時、頭が割れるようにして痛んだのを今でも確かに覚えている。それは小学六年生の、丁度、学習発表会が終わった秋のことだった。

人が死ぬとはどういうことなんだろう。その日をきっかけに、私はずっと答えを探

し続けている。

私には、本を読むことで、簡単に答えを導き出せると信じている節があった。その時手に取ったのが宮沢賢治著、『銀河鉄道の夜』である。「死」を題材にしたこの作品ならば、母の死というものについて自分の捉え方が変わるかもしれないと思ったからだ。また、主人公ジョバンニには病気の母親がいる。私が同じような境遇にいる彼に共感を持ち、この作品を読もうとするのは必然だった。

もしかすると私は心の何処かで、誰かに

この状況を理解して貰いたいと思っていたのかもしれない。読み進めると、その実感が強く湧いた。ジョバンニと私は違ったのだ。帰ってこない父親に、病気の母親。貧乏な生活に、彼をいじめる級友たち。内気な性格もあって、ジョバンニは私が想像するよりずっと過酷な状況に身を置いていた。その反論したり、喧嘩に持ちこんだりする勇氣もない気弱さに、最初に期待していた共感は薄れ、彼は私よりとても「可哀想な人間」なのだと憐れに思った。だが、読み進めていくうちに、銀河鉄道に乗って本当

の幸せを見つけようとする彼とカムパネルラに惹き込まれ、気がつくまで夢中で次のページへと指を運んでいた。物語の伏線、銀河を巡る旅路、カムパネルラの死という衝撃的な結末に、どこまでも広がるような余韻を感じた。カムパネルラの自己犠牲の精神は美しく、自らを省みない勇気が特に素晴らしかった。

しかし、結局は物語であって、死についての答えは見つからなかった。なぜなら私は母の死を同様に美しく思うことはないと思うからだ。物語と現実が違う。けれどこのまま物語全体をフィクションに過ぎないと捨て置くには何か大切なことを見落としている気もする。この違和感は何か。私は初め自己投影していたジョバンニに問いかけたくなった。その日はそのまま、本を棚へと戻した。

翌日、私は再び本棚の前へ立ち『銀河鉄道之夜』を手を取っていた。簡単に答えが出せず、違和感を拭えなかったことが心残りだったのかもしれない。ただ、二回目に読んだ時、ジョバンニは、一回目には見落としていた言葉を、私に向かってゆっくりと語りかけた。

「ぼくはそのひとのさいわいのためにいったいどうしたらいいのだろう」

自らが相手と同じ境遇に立たされた時、果たして自分は相手と同じような勇氣ある行動ができるだろうか、というジョバンニの自問。自分の幸福と、相手の幸福が対立した場合、自分はどちらを選ぶのだろう。

このことに気付かされた時、私は衝撃を受けた。知らない振りをしてきたのだ。この言葉を私自身に置き換えた時、自分が立っていたのは常に被害者意識の土台の上だけだったのではないか、ということに。相手の立場、つまり自分の母の病気を、私は心配するようであり、実際心配していたのは自分の今後だったのではないか。私は「母の死に置いていかれる可哀想な自分」という立場に甘えていただけだ。自分可愛さに、「病気に冒されひどく苦しい母」の立場から目をそらし、損得勘定ばかりしていた自分の浅ましさに腹が立った。

同時に、初めジョバンニに抱いていた共感が予想より薄かったことに納得がいった。彼は初めから他人のことを慮って行動していた。故に喧嘩をしない。カムパネルラと同様に、自己犠牲的な精神を持つ彼は私の

感じたような「可哀想な人間」ではなかった。自己中心的な考え方の私の方が、実はずっと「可哀想な人間」だったのだ。彼に抱いていた共感のようなものは、ただの同調に過ぎなかった。

物語は終盤、「カムパネルラ、僕たち一緒に行こうねえ」と語りかけたところで、ジョバンニは丘の上で目を覚まし、世界が現実に戻る。本当の幸せを見つけることができたカムパネルラは、親友を置いていく時、一体何を思ったのだろうか。また、ジョバンニは、親友に置いていかれたと悟った時、一体何を思ったのだろうか。間もなく、私にもジョバンニとしての役割が回ってくる。ただ、その時私は相手の立場に立てるか、本を読んだ今でも不安なのである。ジョバンニのように相手の気持ちに寄り添っていけるようになる頃にはもう、銀河鉄道の汽笛は鳴っているかもしれない。それでも私は、カムパネルラを送る天上への列車の切符を握みたいと、ただそれだけを思うのだ。

体験書籍

『新編 銀河鉄道之夜』宮沢賢治 新潮社

【二ツ橋文芸教育振興会賞】

私も、あなたも、彼らも

東京都 学習院女子高等科 二年

石川李津

国境なき医師団(MSF)。誰もが一度は聞いたことがあるだろう。世界で医療・人道支援を行う民間・非営利団体だ。私は、医師になることを目指している。自分が生まれた国である南アフリカで医療格差を目の当たりにして、途上国で働くためにMSFに参加したいと強く思った。しかし、日光アレルギーを持ち、屋外にいられない体質なので、それは叶わない。せめて実態を知るだけでもと思い、MSFへの取材内容を記したこの本を手にとった。身の危険も

顧みず、窮する人々を救う彼らの心と体を支えているのは何なのだろうか。

先進国には、途上国に対する搾取・攻撃・侵略などの、歴史における罪がある。途上国の帰属意識を否認して、「文明化の使命」の名のもとに侵略行為を正当化し、伝統を破壊してきた。その影響は現在まで及び、途上国の自立を妨げる要因の一つとなっている。私は、先進国はその罪を償うために、途上国を支援しなければならぬと考えていた。

ところがこの本を読むと、MSFスタッフにそのような意識の存在は感じられなかった。著者は、スタッフが、戦乱によって祖国を追われた難民に接する様子を見て、難民に対する彼らの敬意を感じたという。「スタッフの持つ深い『敬意』は『たまたま彼らだった私』の苦難へ頭を垂れる態度だったのである」「時間と空間さえずれていれば、難民は俺であり、俺は難民なのだ」

そして、哀れみではなく、気持ちと同じ

くするという意味での「同情」を彼らは持つと述べる。「なるほどそれ（同情）は『たまたま彼らだった私』への想像なのだった。上から下へ与えるようなものではない。きわめて水平的に、まるで他者を自己として見るような態度だ」

歴史において、加害者である先進国と、被害者である途上国。罪滅ぼしに途上国を支援すると考える時点で、「私」と「彼ら」を区別しているのだと気づいた。もちろん過去の罪は許されるものではないが、MSFでは、支援する側もされる側も同じ目線に立った活動がなされている。すべての人に対して同胞意識を抱き、自己の範囲を外部にまで広げ、他者を自己に取り込む姿勢が、根本にあるのだ。いかなる勢力からも独立し、中立、公平を保つというポリシーも、この「たまたま彼らだった私」「たまたま私だった彼ら」の観点あってこそものではないだろうか。

「平和は戦争以上に積極的な力でなければならぬ」。紛争が続くアフガニスタンで、貧困層、難民の診療に関わり、干ばつに苦しむ地域の水源確保に従事した故・中村哲医師の著書『天、共に在り』にある言葉だ。

今日世界中で多くの紛争が起きているため、私たちは平和を「戦争の無い状態」と同一視してしまう。平和を実現するには戦争の当事者たちがやめるしかないと考え。ということは自分には関係ない、と。外国で起きている戦争を、確かに無くなつてほしいけれどもどうすることもできない問題と考えてはいないか。こう思っているからこそ、漠然と平和を願いながら、自分にできることは何も無いとして、傍観者という立場に甘んじてしまうのだと思う。

しかし、戦争が無くなることをただ待っていて、戦争は戦争を生み、いつまでも平和は訪れない。MSFの活動は、まさに「積極的な力」なのだ。戦争のない状態としての平和ではなく、誰もが豊かに暮らすという、より高次の平和に向けて、信念と行動の強い力で、一人ひとりの生活を支えている。

国際協力団体がすべての人に人間としての権利を保障しようと尽力する一方で、各地で戦争は続く。敵対する勢力の対立ではなく、戦争そのものと平和の対立という構図を解決しなければならぬ。戦禍により人生を奪われる人々のことを考えるべきだ。

それには、先述した「同情」が必要なのだと思う。この気持ち広がれば、戦争のみならず、迫害、差別、偏見も無くなるだろう。私も、あなたも、彼らも同じだということ意識が、すべての人の権利を守ることにつながるのだ。

私は、「積極的な力」となるために動き出さなければと思ひ、国際協力団体を通じて資金援助を始めた。援助することになったのは、グアテマラの貧困地域だ。資金は、教育、施設の建設、職業訓練、保健・医療などに使われる。彼らと交流すると、遠い国のこともとても他人事とは思えない。

将来医師になれたら、患者さんに接する際も、病気を研究する際も、公衆の衛生を管理する際も、「たまたま彼らだった私」のために尽くしたいと思う。

体験書籍

『国境なき医師団』を見に行く』

いとうせいこう 講談社

【二ツ橋文芸教育振興会賞】

世界のこと

私は絵を描いている。世界がどれほどに美しいか。言葉にすれば陳腐になってしまうそれは、絵の前で感傷的になって話せば伝わってしまうような気がずっとしている。それがしたくて、私は絵を描く。

この世界の美しいもの。車のクラクション、犬の鳴き声、常夜灯の白い光、夏の涼しい風、スパイスの香り、草いきれ、体調不良、お風呂場で鼻歌をうたったこと、縞模様タオルケット、冬、朝、その他全部。

私は、世界の美しいものを全部混ぜたらそれはそれは、たいそう静かな音がすると思う。だから、世界の全部が描いてあっても大丈夫な絵画というものは、とても静かだと思う。音がないから静かなのとは少し違って、静かという言葉がぴったりの音かしているような気がするのだ。その静けさの中には、生きた世界の全ての、命の気配がしている。

「命の気配、命の予感。これを人は音楽と呼んできたのではなからうか」

「耳を澄ませば、こんなにも世界は音楽に満ちている」

私が世界の全てを美しいと思う感覚は、世界は音楽でできていると思う感覚と似ていると思った。絵画の静かな息づかひも、それに対峙する自分の呼吸も、廊下の青さも、遠くの話し声も、その瞬間の美しいものは全部音楽だと思う。同時に、世界の美しいものは全部美術だとも思う。私はいつも世界を満たすそれに聞き入って、美しさに胸を焦がし続けている。

静岡県 浜松市立高等学校 三年

横井菜々

絵を描いているとき、本当は絵を描くよりも考え事をしている。筆を小さく動かしてできる空気の流動に耳を澄まして、そこから世界のことを考える。なんだか、本当に世界のことばかり考えている。世界というといちいち大仰な言葉に聞こえるけれど、だけどやっぱり、世界という言葉の、世界全部を背負っているその響きが好きだ。そこから中へ気を散らしながら、ずっと絵を描いて、世界のことを考えて、思考のうねる音を聞く。

私は音楽をする人も一緒なんだろうと予想する。音を鳴らしながら、音を鳴らしている音を聞いて、ピアノの蓋の中の空洞の音を聞いて、コンクール会場やリビングルームや音楽室にただよう埃が空気をぶつぶつさせている音を聞いているんだと思う。小説の中には綺麗な表現が沢山、数えきれないほどあった。音に真摯に向き合う音楽家たちだから語れる言葉があることを知った。その言葉はシンプルだった。静かに体にしみわたる、本当にシンプルな言葉だった。

私は少し羨ましいと思った。ピアノの曲を弾き進めて行く。するとよどみのない、

音と一緒に流れる美しい言葉が生まれていった。

見方によっては美術と音楽は正反対で、静と動という言葉を当てはめて良いと思う。絵は黙っているから進んだり戻ったりしない。だから思考はそこに留まる。その水溜まりをすくいと続けている感覚である。一つの何かを懐で温めることはできても、スピードのある思考には出会いにくい。私もピアノが弾けたら動の世界が見られるのかと考えて、ピアノを弾いてみるようになった。好きな音楽を弾いている人の指を、見よう見まねで真似した。指の動きの感覚と目の記憶をたよりに鍵盤を押す。そうすると面白いくらいいろいろな音が出て、重なったり伸びたりくぐもったりもする。弾くたびに嬉しくて涙が出そうになる。伸びていく音がその過程で含んでいく空気の粒に、感傷が押し寄せる。ああ、やっぱりこんなにいいことをしてたんだと納得して、心が満たされる。

私が今までに述べたことは、少し独りよがりだと思う。私はそのことが悔しい。あの音楽家たちの音には、誰にでも届く美しさがあった。私もそれがいい。そういう真

つすぐでシンプルな言葉がほしい。そんな言葉をそなえて、絵を描いてみたい。私はそれを当面の目標にして、出会う美しいものに心をぐちゃぐちゃにして喜ぶ自分のことを、少し客観的に見つめていきたい。美しさの根源や、それを表すのに心地よいシンプルな言葉を探したい。探して見つけていって、いつか複雑さの果てにあるシンプルを獲得したい。

その思いを胸に、私は明日も世界の全てに感動しながら生きていく。シンプルさを手に入れて落ち着くたびに、また子供に戻って支離滅裂に物思いをする。そうやって勝手に考え続けながら、芸術にふれ続けて生きる。はやくあの音楽家たちの音みたいに、私の絵が誰かに届く言葉になりますように。

体験書籍

『蜜蜂と遠雷』 恩田 陸 幻冬舎

【二ツ橋文芸教育振興会賞】

とらわれないうこと

私には尊敬している姉がいる。その姉に勧められてこの本の存在を知った。初めて読んだのは中学三年生のときで、そのときは内容が難しいと感じて、姉には悪いが途中で本を閉じてしまった。それから二年経ち、当時の姉と同じ学年になった私は、もう一度この本を読んでみようと思いた。

第二次世界大戦前の昭和十二年、大日本帝国陸軍内に軍中枢の反対を押し切って設立された「D機関」と呼ばれるスパイ養成学校から物語は始まる。奇妙奇天烈な選抜

試験を突破し、想像を絶する訓練を易々とこなす十数名の養成学校第一期生。化け物とも揶揄される彼らは「自分ならこの程度のことは出来なければならぬ」という恐ろしいほどの自負心を持ち、驚くべき学習能力でスパイの技術を身につけていく。

作中で謎の多い人物として描かれている結城中佐も、かつては有能なスパイであった。しかし、国外で敵中に捕らわれたことで、自身の本格的なスパイ活動が不可能になった。そこでD機関を設立し、自分に代

わるスパイの育成に乗り出したのだ。

私がこの本で印象に残った言葉は二つある。どちらも結城中佐がD機関の学生たちに言ったセリフだ。一つは「いかなるものにも、決してとらわれるな。とらわれないうこと」こそが、スパイが生き延びるために最も有効な、そして唯一の手段だ。もう一つは「諸君が任務を遂行するために唯一必要なものは、常に変化し続ける多様な状況の中でとっさに判断を下す能力——即ち、その場その場で自分の頭で考えること

鳥取県 青翔開智高等学校 二年

戸田ゆあ

だけだ」。

この作品の舞台となっている時代において、陸軍はお国のために散ることを良しとされていた。にもかかわらず、結城中佐は学生たちに「死ぬな、殺すな」とたたき込んだ。民主主義の考え方が浸透している時代に生まれた私にとっては、スパイ養成学校で教えられている考え方を受け入れるのは容易いことだが、この作品の時代に生きていた人には受け入れ難い考えだろう。それでも、その考え方を難く受け入れたD機関の彼らや、それを教える結城中佐は、考え方が柔軟で時代を先取りしていると思っただ。

話が変わるが、夏休みが始まる前、総合的な探究の時間にP R O Gテストが行われた。P R O Gテストとは、ジェネリックスキルの成長を支援するプログラムのことで、私はそのテストで自分が次のような考えを持つていることに気づいた。「何も考えずにただ言われたことを完璧にこなしたい」それに気づいたとき、私は、思っていないことだが、自分は戦時中に生まれていれば今より生きやすかったのではないかと思ってしまった。周りに流されやすく、

みんながそうしているなら自分もそうしようと思ってしまう私は、戦時中、特に軍隊では褒められたはずである。もし自分が戦時中に生まれていたら、たとえ性別が違っていたとしても、お国のために死ぬことを素晴らしいとし、それをおかしいと疑うことはなかっただろう。現代に生きる私たちは、人それぞれの多様性を認め合う反面、社会に出た途端にその人だけが持つ個性を求められてしまう。個性や独自の考え方を求められる現代よりも、規律に従えば集団の中の一人として個を出さずに生活できる時代の方が、芯を持たない自分にとって生きやすそうに感じてしまった。

そんなことを考えていたそのとき、私はあることに気がついた。

私にとって姉は目指している人。でも、それは結城中佐の言う「とらわれている」状態ではないだろうか。思えば、私は幼い頃から自分をどう表現すればいいのかわからなかったため、一番身近な先輩である姉を手本にして、姉のようになっていることが正しいと思ってきた。だから色々なことを真似してきたし、姉が経験したことは自分でも試してみた。この本を読もうとしたとき

っかけも、姉だ。私はこの本で自分のアイデンティティを見直すようになった。最近では、姉を参考にしすぎて私が私であるとはつきり言えることが何かわからなくなってきたのだが、自分を探すようになった。私にとって「とらわれないこと」は、姉を理想としないこと。今まで自分のことをいかにいい加減に、ぞんざいに扱ってきたかを認識した私は、これからは自分自身をもっと大切にして、のびのびと生きることにした。その第一歩として、まずは今まで手に取ったことのない本を読んでみようと思う。誰に勧められるのでもなく、私が心を惹かれた本を。

体験書籍

『ジョーカー・ゲーム』柳 広司

KADOKAWA

【二ツ橋文芸教育振興会賞】

添加物から考える「食」の豊かさ

香川県立高松高等学校 二年

酒井菜摘

高校に入学してから、母の手料理以外を口にする機会がぐっと増えた。うっかりお弁当を忘れ、慌ててコンビニに駆け込み手に入れたおにぎりやパン。テスト終わりの帰り道、弾む会話と今にも溶けそうなアイスクリーム。その手軽さから日常のふとした楽しみまでが簡単に満たされ、好きな時に好きな物が食べられる今の時代に感謝している。だが、この一冊の本を読み終えた今、「食」の見つめ方が変わったように感じる。私は本当の意味での「食の豊かさ」

を履き違えていたかもしれない、と。

この本の著者である安部司さんは、無添加食品や自然海塩の開発を通じ、食の安全について全国で講演を重ねてきた添加物のエキスパートだ。だがその過去には誰もが驚く。現在、その毒性や危険性に警鐘を鳴らしている安部さんのかつての職は、企業に食品添加物を売り込み、普及を促すトップセールスマンだったのである。

食品添加物と聞くとほとんどの人はマイナスなイメージを抱くだろう。私も例外で

はない。不気味な雰囲気さえ感じる難解な物質名がずらりと並んだ商品と、「保存料・着色料は使用しておりません」と謳われた商品があれば、きっと多くの人が後者に健康的な印象を受けるに違いない。私は以前、安部さんの講演会に参加したことがあるが、小瓶に入った白い粉でマヨネーズを作ってしまったのには仰天した。普段何気なく口にかけているものが実は得体の知れない薬品でできているかもしれないという現実に愕然とした。

だがこれらは添加物の「影」の部分であると安部さんは言う。物事には光と影の両面があるように、私たちが「安く」「手軽で」「美味しい」食べ物を常に得られるのは、添加物の「光」の部分だろう。私たちは食生活の地盤を支えている添加物の大きな恩恵よりも、害悪ばかりに目を向けようとしていた私はこの事実にはハッとさせられた。安部さんは添加物の排除を求めているのではなかった。添加物によって引き起こされている食の価値観の崩壊を危惧しているのであった。

「安価」、「手軽」、そして「均一化された美味しさ」。知らず知らずの間に、これらの添加物の大きなメリットに支えられてきた私たちは、食べ物が簡単に手に入ってしまう日常に馴れ、どのように作られたのかという「過程」に目を向けなくなっているのだという。

新型コロナウイルス感染防止のため三月に始まった全国一斉休校中、小さな庭で初めて家庭菜園に挑戦した。夏野菜にとどまらず、欲張ってスイカの苗まで用意していた私。野菜なんてその辺にある土に水さえやっておけばどっさり実る。そう信じてい

た。土壌を植物が好む弱アルカリ性に傾けるため、下準備として土に石灰を混ぜる必要があること。スイカは朝九時までに人工授粉をしなければ永遠に実らないこと。全部知らなかった。知る機会すらなかった。朝晩と一日二回くみ上げるバケツ一杯分の水。あつという間に伸びてしまうトマトの

わき芽に、急に白い粉を吹き始めたキュウリの葉。我が家の生活の軸は野菜の成長を見守ることへと変化した。それなのに。味、量、そして見た目、どれをとつても満足していくような出来ではなかった。自家製の野菜が食卓を彩るとばかり思っていたがそれは理想に過ぎなかった。芽が出て、花が咲き、そして実る。たったそれだけの単純な自然の営みに、膨大な時間と、野菜の成長に寄り添うといった労力と、長年の経験によって培われた知恵という三つが盛り込まれた人間の「手間」が深くかかっていたことを知った。自然の恵みが人の手を介しながら私たちのエネルギーとなっていく道筋や命の流れを感じることでできた気がする。店頭に並べられた綺麗な野菜を選ぶだけにすぎない「消費者」という立場では理解できなかつたことだろう。

確かに二十一世紀の今、食生活は格段と豊かになった。だが、食品添加物が実現した大量生産によって、調理過程の見えない食べ物が生産になりすぎたが故に、「食」というヒトの生への原点を軽く見てはいないだろうか。

食品添加物も、食の豊かさを手に入れるための人類の進歩や努力の結晶には変わらない。食べ物をより美味しく保つための工夫の発展だと言えるだろう。だが、本当の食の豊かさとは、大地の恵みと人間が守り抜いてきた味覚とが融合したとき、命への感謝の気持ちとともに感じる「美味しい」なのだ知った。便利さを過剰なまでに求めることではないのだ。この夏、家庭菜園を通して、野菜が自分のもとへ届くまでの「過程」を痛いほど見せつけられた私の心に、「食べ物の有難さが分からない人に命の重みなど理解できるわけがない」という安部さんの言葉が深く刺さった。

庭先でかぶりついた手作りのミニトマト。舌先に滲みる酸っぱさが、命の繋がりを忘れるなというメッセージのように思えた。

体験書籍

『食品の裏側』安部 司 東洋経済新報社

きつと美しいものに出会える

作家

辻原登

「(……)その呪いを抱えることは、きつと悪いことだけではないのだからとも思う」。

そうだ、きつと美しいものに出会える。美しいものは、タイトルにある通り、世界にゆさぶりをかける。賀井さんが直面する恐怖と不安を言葉に変換する作業は容易ならざる道だろうが、既に彼女にはその十分な覚悟と準備、そして能力のあることがこの作品で証明されている。ラヴクラフト経験は貴重だが、世界にはもっと想像力を鍛えてくれる作家と作品がある。そこには他者がいる。文中、「暴力に耐えてさえいれば、母はいなくなるらない」という言葉は私の胸に突き刺さった。

蟬が死ぬ時は必ず上を向いて死ぬ、と本に書かれていたことから咄嗟に外に出て、蟬の死にざまを見に行く行動派の山崎君だが、しかし読み進むうちに彼の内面の感情と思考こそダイナミックだと気付かせてくれる。

「死ぬ」という感情を想像し、「風いだ海の上に夕日がゆつたりと(……)」「命という名を背負ったろうそくが(……)」といった巧みな比喩は単なる比喩でなく、その本質を衝く。「死と再生」についての含蓄に富んだ考察。

さんの真骨頂だ。土地と風土の描写、具体的な人物名と地名がソナタ形式のように展開して、「一度でもいいからこのような歌をもらってみたい」とコーダまで付いている。

カムパネルラの死を美しいと感じる。しかし、「母の死を同様に美しく思うことはない」。この違和感を単にフィクションと現実の違いに止めておかず、一歩進んで、ジョバンニの「ぼくはそのひとのさいわいのためにいったいどうしたらいいのだろう」という問いかけへと転回、あるいは止揚する。思考の流れ、変化が佐藤さん自身を高めてゆくのを読み取れて清々しい。

「同情」という使い古されたように見え、余り評判のよくない言葉が、手垢を洗い落とされて力強く甦る過程が鮮やかだ。「慈善は恵与のみを意味せず、同情を以て真目的となすなり」(北村透谷)。

石川さんの認識の基本は「たまたま彼らだった私」「たまたま私だった彼ら」への気付きにある。自力で普遍に達しようとする貴い思考の営みだ。

「美しいものを全部混ぜたらそれはそれは、たいそう静かな音がすると思う」「世界の全部が描いてあっても大丈夫な絵画というものは、とても静かだと思う」とある。絵を描くことに集中する横井さんの手は考える。世界について考える。考え

ることを見ている。見ていることを考えている。音楽のように世界を聴いている。まるで印象派の画家について語る小林秀雄のようだ。

「D機関」というスパイ養成学校があった、とされる。そこでは柔軟な思考と行動を訓練させられた。スパイは人類最古の職業の一つだ。戸田さんはスパイ志願ではないが、優れたスパイ術は自由獲得のために大いに役立つことを発見する。脱「姉」宣言がヴィヴィッドで初々しい。

「自家製の野菜」で我が家の食卓を彩ることが出来たらどんなに素晴らしいだろう。しかし、それはとても困難な仕事で、酒井さんは失敗するのだが、無駄ではなかった。「自然の恵みが人の手を介しながら私たちのエネルギーとなっていく道筋や命の流れを感じることができた」のだから。食品添加物の光と影、「消費者」「美味しさ」についてなど、優れて啓蒙的なエッセイだ。

惜しくも選外となった作品もそれぞれ強く印象に残った。原心海さんの『手紙』には、ドストエフスキーの『貧しき人々』のワルワラとマカールの手紙について「もし手書きのものを読むことができたらどれほど違う印象を受けるだろう」とあった。存在しないオリジナルな手紙への夢想!

体験と思考と表現

歌人

穂村弘

『世界にゆさぶりをかけるもの』は、これまでの読書体験記の中では見たことのないタイプの文章だった。暴力を乗り越えるために真の恐怖を求め、という感覚に戦慄を覚えた。暴力は世界を一元化して既知のものとするという認識から、作者は自らが生きる世界の未知性を回復するような「想像力を超えた」「誘惑する恐怖」をラヴクラフトの作品に見出して惹かれてゆく。その心理を描く筆致に引き込まれた。ロジカルに見えつつ、その奥の扉を開くような気配がある。読書体験、さらには文学というものの根源に迫るような凄みを感じた。

『和歌に愛をこめて』は、とても楽しい作品だった。和歌とワールドワーク。平安時代と現代。日本と世界。縦横無尽に展開される思考の軌跡は高校生離れしていないが、それぞれの要素にきちんと実感が伴っている。冒頭の「十歳の自分が書いた感想文」など、ユーモアのセンスも魅力的だ。『生と死』の「死にざまが一目瞭然の生き物を自分の目でしっかりと見ておきたかった」という一文には意表をつかれた。この発想は文章の全体を象徴していると思う。『このように「死ぬ」ということを深く考えられる様々な見方が生じてくる。そして、それはまた別に「生きる」ということにもまた違った新たな発見が生まれるかもしれない』とあるように、「死」の形を通して「生」の意味を求める行為のように思えた。泳いでいる時に海が見えないように、「生」のただなかになる時には、その意味は見え難いのもかもしれない。『とらわれないこと』には、ミステリーの叙述トリックめいた味わいがあった。「私には尊敬している姉がいる」という一文から始まるのだが、その姉に勧められた『ジョーカー・ゲーム』から学んだのは「姉を理想としないこと」だという。入れ子というかクラインの壺というか、読み進むうちに思わぬところから顔が出る。その感覚に新鮮なスリルを感じた。『世界のこと』は、どんな文章につけても成立するような面白いタイトルだ。内容もユニークで、「私が今までに述べたことは、少し独りよがりだと思う」と自身が書いているように、「絵」と「音楽」と「言葉」の関係を今一つ追い切れないところがある。だが、この混乱は「世界」から新たな可能性を見出す契機になりそうだと思う。いわゆる読書体験記として望ましくいと読み手や書き手自身が思うような文章は、既知の世界像をなぞって固めてしまうようなものであるかもしれないのだ。本作の根底には、その逆の未知性への眼差しがあると思う。『添加物から考える「食」の豊かさ』では、読書を起点に「家庭菜園」に挑む体験を通して独自の認識に到達し

ている。「過程」を無視して結果のみを求め得ることが「消費者」の特権だが、「手間」を無視できるその立場が「消費者」自身をスポイルして「生への原点」から遠ざけてしまう。説得力のある文章だった。『私も、あなたも、彼らも』には、「たまたま彼らだった私」への想像力を通して、「同情」という言葉の再定義を迫るような印象があった。「平和」を「戦争の無い」無風状態と見なすのではなく、より積極的な力として捉え、自分自身もそのために動き出そうとする姿勢にも注目させられた。『拝啓、銀河鉄道に乗る母へ』には「物語と現実の違い。けれどそのまま物語全体をフィクションに過ぎない」と捨て置くには何か大切なことを見落としている気もする」という一節がある。これは読書体験の本質を捉えていると思う。現実の世界と一人一人の世界像の間には必ずズレがあり、けれども世界像を通さずに世界そのものを把握することはできない。本とは一つの世界像の塊であり、だからこそ、我々はその時々々の読書体験から無限の意味を汲み出していくことができるのだらう。「それでも私は、カムパネルラを送る天上への列車の切符を掴みたいと、ただそれだけを思うのだ」という一文に心を揺さぶられた。

制限があるなかでの体験記

作家

角田光代

『拝啓、銀河鉄道に乗る母へ』を書いた佐藤万葉さんは、最初はひとり残されるジョバンニに自身を投影していたが、やがてそれが「同調」だったと気づく。そして自身のかなしみではなく、他者の苦しみに目を向けようと考える。その気づきが、ていねいな言葉で描かれている。

『私も、あなたも、彼らも』を書いた石川李津さんは、世界の未来について、自身の将来について、すでにしっかりとした考えと意思を持っている。『国境なき医師団』を見に行く』のなかの「同情」という言葉の意味の変換に、まさに石川さんも「同情」している。文章に説得力があり、私も考えさせられた。

『世界のこと』の横井菜々さんは、自身の好きな絵を描くことと、本で読んだ音楽とを並列にし、「あの音楽家たちの音みたいに、私の絵が誰かに届く言葉になりますように」と書く。音みたいに絵が言葉として届くようにという表現は、一見わかりづらいが、真なる「美しいもの」には表現方法の区別はないという強い信念を持っているのだらう。うつくしさへの信頼と希求がせつせつと伝わる文章だ。

戸田ゆあさんの『とらわれないこと』がおもしろいのは、尊敬する姉から勧められた本を読むこ

とで、尊敬する姉の勧める本なんて読んでいることと自分が「とらわれている」のだ、と気づく箇所だ。読み手の想定を大きく外れる着地点が独特で、印象に残った。

『添加物から考える「食」の豊かさ』を書いた酒井菜摘さんが『食品の裏側』という本を選んだのがまず意外で新鮮だった。私もなんの知識もないままに、食品添加物はよくないと思っているところがあつたので、読んでいて勉強になった。野菜作りという、まさに今のパンデミック下ならではの体験を通じて、力強い体験記を書いたと思う。

山崎陽大さんの『生と死』の、蟬は死に際に空ではなくて地面を見ているというくだりはものすごく興味深かった。恐怖やかなしみといったネガティブなとらえかたをさががちな死に、山崎さんはべつの角度から焦点をあてている。哲学的な問いをとでもうつくしい比喩を用いて描いていて、文章に品格があり、私自身、風いだ海に夕日が沈む景色を見ている気持ちになった。

森谷鈴音さんの『和歌に愛をこめて』はまさに和歌への愛が炸裂している。この体験記を書くためではない、もっと深く日常的な愛が、リズムカナルな文章からスパークしていて、読んでいたのしかった。平安の時代に詠まれた歌から、そこに

在り続ける土地、巡り続ける季節、何千年と繰り返される自然の変化をも、森谷さんはとらえている。早く今の状況が落ち着いて、森谷さんが淡路島東山寺で十二神将像を思うまま見学できますようにと願わずにいられない。

衝撃的な一文ではじまる賀井暁月さんの『世界にゆさぶりをかけるもの』。一方的な方向性の恐怖と、双方向的な恐怖という観点には、はっとさせられた。私はこんなふうに恐怖をとらえたことがなかったからだ。そして双方向的な恐怖は、未知であるために私たちを誘惑する、と賀井さんは続ける。誘惑にに応じて恐怖に身を投じれば、私たち個々の世界が揺らぐ。その揺らぎのなかで、賀井さんは暴力について、また自身について分析し、的確な言葉で思考を重ねていく。読み、考え、書く過程で、現実と闘い、自身の世界を獲得していく巨大な体験が、ここには描かれていると思う。

二〇二〇年はパンデミックにより、通常とは異なる日々が強いられた。ふだんなら、読書をきっかけに、各地に移動したり、だれかに会いにいたりして、何かを得る体験記が多いけれど、今回は、「読む」こと自体がリアルな体験になった文章が多く、高校生の、柔軟さとたくましさを感じた。

言葉をもつことの大切さ

文部科学省
初等中等教育局主任視学官

長尾篤志

『拝啓、銀河鉄道に乗る母へ』は、自身の母親をカムパネラと重ねて自身を振り返り思いを積み重ねた作品である。筆者の佐藤さんは最初ジョバンニを自身に重ねるにはやや違和感をもっていたが、再度『銀河鉄道の夜』を読み直して「ほくはそのひとのさいわいのためにいったいどうしたらいいのだろう」というジョバンニの言葉に目を見開かされている。コロナ禍の中、自分だけは助かるうとコロナ感染者を排除する風潮もあるが、佐藤さんのようにジョバンニの言葉を正面から受け止められる人でありたい。

『世界にゆさぶりをかけるもの』は、正に冒頭からゆさぶりをかけてくる作品である。筆者の賀井さんは暴力の中にあつて、自身を冷静に分析し、表現する言葉をもっている。ラヴクラフトの本を通して賀井さんが「他者と関わるための言葉という強力な道具と、他者と関わりとうとする強い意志」を得たとすれば、その読書は賀井さんを育てた大きな体験であったと言える。

『生と死』は、高校生らしい感性で「死にざま」について述べた作品である。私自身も高校生の頃、死について考えることは少なくなかったが、「死にざま」について考えることはなかった。確かに、人間にとってもある人の「死にざま」がその人の

「生きざま」を端的に表していることはあり得ることだろう。蟬が仰向けに死ぬことがそれを象徴的に表していると感じられることは面白い。

『私も、あなたも、彼らも』は、高校生の逞しさを感じさせられる作品である。この作品の全体のテーマは、「同情」である。表題の『私も、あなたも、彼らも』の後に省略されているのは「時間と空間がずれていれば立場は替わっていた」だろう。MSFは、この考えに基づいているからこそ、誰かを責めるのではなく「今、この場所で必要なこと」が見えるのだろうか。

『世界のこと』は、『蜜蜂と遠雷』の読書体験記であるが、私は横井さんのこの作品を通して音楽と言葉と絵の関係について考えさせられた。人は進化の過程で、まず音を操ることを始め、それが集団で意思疎通をする言葉の発生につながり、何らかのシンボルを表したり考えを進めたりするために図や絵を生み出したのではないかと。そのようなことを考えながら何度もこの作品を読み返した。

『和歌に愛をこめて』は、筆者の森谷さんの大江匡房への思い、そして和歌への思いがストレートに伝わってくる作品である。また、文章構成も表現もよく興味をもつて読ませる作品である。森谷

さんを囲む環境も和歌への強い思いを育てたのではないかと。高校卒業までまだ時間がある。今後、何人かの歌人と和歌を取り上げ著したものをさらに読んでみたいと思わされた。

『とらわれないこと』は、高校生が正にこれから飛び立とうとしている姿を表現した作品である。筆者の戸田さんは『ジョーカー・ゲーム』という小説の中で「とらわれないこと」こそが、スパイが生き延びるために最も有効な、そして唯一の手段だ」という言葉に強く反応している。それは、戸田さんがこれから自分らしくのびのびと生きていきたいと現在考えていることが大きいのではないかと。

『添加物から考える「食」の豊かさ』は、新たな視点を教えてくれる作品である。この作品は、筆者の酒井さんが『食品の裏側』という本を通して学び、考え、体験したことを、自らの「食」を振り返りながら追体験させる作品である。それは心地よい体験である。

生きていくことの葛藤

全国高等学校長協会

林 達也

賀井暁月さんの『世界にゆさぶりをかけるもの』を読んで圧倒され、受け止めるのに体力と時間が必要だった。賀井さんが体験してきたつらく厳しい現実。信じたくない日常を受け入れるには大きな葛藤があったであろう。ラヴクラフトを読んだことで、「非現実」としか思えない「人知を超えた未知の恐怖」を「現実」として受け止め、自身が置かれている状況を客観的に分析し、生きていく力を得たことにただただ心が揺さぶられた。

森谷鈴音さんの『和歌に愛をこめて』は楽しさが伝わってくる文章だった。史跡巡りと和歌をこよなく愛する森谷さんの揺るぎない思い。「蚊に刺され、髪に毛虫を付けて」史跡巡りをしている高校二年生。失礼ながら大げさに書いていると思っただけ、読み進めていくうちに、この思いは半端ではないことが分かり、身近にいたらその思いを受け止められるか心配になる熱量を持つ文章だった。

日々のトップニュースが、新型コロナウイルス感染症の陽性者数、重症者数、死亡者数。「生と死」は対立する概念ではないという山崎陽大さんの『生と死』を読み、志賀直哉の『城の崎にて』を思い出した。事故にあっても生きている自分、

その自分が図らずもイモリの命を奪ってしまう。山崎さんも高校三年生で「生と死」が連続し、「死」は理不尽なものではないという気づきに至ったようだ。生きていくには、人生は不合理であることを受け入れることが必要だ。「不合理ゆえに我信ず」はけだし名言である。

佐藤万葉さん『拝啓、銀河鉄道に乗る母へ』も生と死に向き合った、ちょっと不思議な文章であった。理不尽とは思えない身近な人の死を一杯受け止めようとしている葛藤が描かれていた。合理的には死を受け止めることができない。その苦悩が大いに伝わってきた。

人が強くなるには、何かあきらめた経験が必要なのかもしれない。石川李津さんの『私も、あなたも、彼らも』を読んで、そう思った。世界の出来事を「我がこと」として捉え、憐みではなく「敬意」が必要であることに気づき「すべての人に対して同胞意識を抱き」「他者を自己に取り込む姿勢」こそが国境を越える共生社会の実現につながると思う。国境なき医師団への思いが強い石川さんは日光アレルギーのためその思いはかなえられそうにもないとのこと。しかし、諦めることなく貧困地域の資金援助に取り組んでいるという。頼もしい限りだ。酒井菜摘さんの『添加

物から考える「食」の豊かさ』も、読書体験による世界観の転換がテーマとなっている。酒井さんの文章を読んで感心したのは、コロナ禍を活用？して、野菜作りを行い「生産者」の視点を「発見」したところと、「添加物＝悪」というステレオタイプにはまっていけないところだ。読書体験が豊かさとは何か、「食の価値観」とは何かを考えるきっかけと行動を生んだ。

『世界のこと』は不思議な文章だ。絵を描くことが好きな横井菜々さんの、音楽による世界観の表現への思いが綴られているのだが、横井さんの思いに言葉の表現が追いついていかない。そのもどかしさが伝わってくる文章だ。共感覚の世界とはどのようなものなのだろうか。『とらわれないこと』も不思議で印象に残る文章だった。尊敬する姉に勧められた本を読んだことで、自己のアイデンティティについて考え、姉から自立する思いへとつながっていく。他者をそして自己を客観的にみることができるようになったのだろうか。読書とは、本人が思いもかけない場所へと連れて行ってくれる体験だ。

第40回「全国高校生読書体験記コンクール」入賞者（敬称略）

【優良賞】 39編

北海道	道立	帯広柏葉高等学校	二年	原 心海	手紙
青森県	県立	八戸高等学校	一年	坂本 葵	死があるから生きたい
秋田県	県立	能代高等学校	一年	富樫美結	芯をもって
山形県	県立	山形西高等学校	二年	石山 桜	空気ってなんですか。
福島県	県立	安積黎明高等学校	一年	溝井菜月	母の強さ
茨城県	県立	水戸第一高等学校	二年	深堀有里佳	感じるままに
栃木県	国立	小山工業高等専門学校	三年	関 咲侑花	心の花の咲かせ方
群馬県	県立	渋川女子高等学校	一年	小菅七海	新しいチーズを探しに行こう
埼玉県	県立	小鹿野高等学校	二年	林 楓奈	私も人間合格
神奈川県	私立	英理女子学院高等学校	二年	吉住叶羽	19年目の読者
新潟県	県立	高田北城高等学校	一年	柴田奏太朗	今の僕にできること
富山県	県立	富山商業高等学校	一年	坂井空羅	できないことをできるように
石川県	県立	金沢泉丘高等学校	一年	長島 鼓	一生忘れない友だち
福井県	県立	大野高等学校	二年	堀 真由子	言葉の力
山梨県	私立	山梨英和高等学校	一年	久瀧愛桜	色とりどりの個性～Multicolored World～
長野県	県立	屋代高等学校	一年	松川由奈	愛されるということ
岐阜県	県立	不破高等学校	三年	矢野杏果	お弁当作りの楽しさと大変さ
愛知県	県立	刈谷高等学校	一年	坂本 聖	人生のゴール
三重県	国立	鈴鹿工業高等専門学校	一年	川井優汰	生き方を見つめる時間
滋賀県	県立	安曇川高等学校	三年	木津七緒子	負の感情
京都府	府立	洛西高等学校	二年	宇高瑠爽	よい獣医ってなに
大阪府	府立	天王寺高等学校	一年	賀来 碧	言葉のゆりかご
奈良県	県立	青翔高等学校	二年	北隅奈王	プラスチックごみの課題解決に向けて
和歌山県	私立	智辯学園和歌山高等学校	一年	水崎結香	楽園と未来
島根県	県立	松江南高等学校	一年	有間聖乃	仲間とともに

岡山県	県立	倉敷商業高等学校	二年	浅原杏奈	裏表紙をみつめた30分
広島県	私立	広島文教大学附属高等学校	二年	松本一花	人生は一度きり
山口県	県立	下関西高等学校	一年	平野光悦	明日死んでも後悔しませんか
徳島県	県立	鴨島支援学校	三年	葉利友紀	マイペース
愛媛県	県立	松山東高等学校	一年	明日孝允	わからなさをひきうける
高知県	県立	高知農業高等学校	三年	青木詩桜	みんなが幸せになれるように
福岡県	私立	明治学園高等学校	一年	小海茉由	出港
佐賀県	県立	鹿島高等学校	一年	村井優希	生限時間
長崎県	県立	諫早高等学校	二年	朝長 桜	情報を発信すること
熊本県	県立	小川工業高等学校	二年	松永莉奈	過去を振り返り未来を思う
大分県	私立	大分東明高等学校	一年	五十川 凧	生きている以上、前へ
宮崎県	県立	宮崎西高等学校	一年	田品穂乃	現代への「審判」
鹿児島	県立	錦江湾高等学校	一年	榎田彩夏	試練をのりこえる為に
沖縄県	県立	開邦高等学校	三年	大城そのか	後悔のない人生を送る方法
【入選】					
186編 (各県の校名・氏名は五十音順)					
北海道	道立	釧路北陽高等学校	二年	小林彩夏	name(混同できない世界)
	道立	札幌南高等学校	一年	花田陽咲	兎は何を見ているか
	道立	札幌南高等学校	二年	眞繼 都	原点と現在地
	道立	函館工業高等学校	二年	中西伶旺	「ハコダテ開拓使」になる
青森県	県立	青森高等学校	一年	小倉匡敬	一瞬一瞬に尽くして
	県立	青森高等学校	一年	櫻田万葉	意志のあるところに
	県立	八戸高等学校	三年	高橋 翠	生きものとしての責任
	県立	八戸高等学校	三年	水石萌菜	「ノーサイドの精神」とは
岩手県	県立	一関第一高等学校	一年	山田侑佳	カメレオン
	県立	一関第一高等学校	二年	岩渕咲枝	私の人生を変えた一冊
	県立	黒沢尻北高等学校	三年	齋藤陽菜	古典と英語が紡ぐ夢
	県立	盛岡北高等学校	二年	澤口菜々美	命こそ宝
宮城県	県立	佐沼高等学校	一年	安倍結子	夢中がもたらす充実

県立	仙台二華高等学校	二年	井崎英里	イーハトーブへの切符
県立	松山高等学校	二年	高橋怜華	小説から学ぶこと
県立	宮城第一高等学校	二年	尾上南那	私と母の秘密の時間
県立	秋田南高等学校	一年	小野いずみ	私の人生観を変えてくれた本
県立	大館桂桜高等学校	一年	岩沢光夏	音楽の力
県立	大館桂桜高等学校	二年	安部芳大	自分と向き合うことを教えてくれた本
県立	横手高等学校	三年	伊藤 紬	二つの使命を胸に
山形県	小国高等学校	三年	岩崎はるか	昨日の私に明日が来た
県立	上山明新館高等学校	一年	高橋ひまり	言葉の魔力
県立	新庄南高等学校	二年	大野萌果	「見える」が全てなのか
県立	山形工業高等学校	三年	村形知歩	二つの世界
福島県	安積黎明高等学校	一年	渡邊梨衣	すべては手作り
県立	只見高等学校	二年	三宅実美	本当の自分を生きる為に
県立	福島高等学校	一年	守谷和貴	紙吹雪
県立	福島東高等学校	一年	酒井咲良	前を向くために
茨城県	水城高等学校	一年	伊藤綾子	カメレオンと生きる
私立	水城高等学校	一年	山崎菜琴	本と私
県立	水戸第一高等学校	二年	青木大翔	今を生きるということ
県立	水戸第一高等学校	二年	加藤美咲	溢れ出す音楽、閉じ込める羨望
栃木県	宇都宮高等学校	一年	神成悠里	極限状態の兵士の思考
県立	宇都宮女子高等学校	一年	佐藤花菜	海の和音
国立	小山工業高等専門学校	一年	手塚柊磨	曾祖母の残したもの
県立	真岡女子高等学校	二年	立道袖羽	妬みは進化への足がかり
群馬県	共愛学園高等学校	三年	戸神愛理	奇跡の連続で「生きている」
県立	中央中等教育学校	四年	小山みどり	忘れたくない感情
私立	常磐高等学校	三年	大平夏菜子	震災を経験して得たこと
埼玉県	前橋女子高等学校	二年	山田奈央	「生きる」こと、「繋がる」ということ
私立	開智高等学校	一年	谷口彩希	一人旅
私立	星野高等学校	一年	池上葉奈	文字にすること
私立	星野高等学校	一年	田中心結	幸せとは何か

千葉県	国立	筑波大学附属聴覚特別支援学校	二年	権田陽向	見えている世界の狭さに気づけ！
	国立	筑波大学附属聴覚特別支援学校	二年	宮川紗良	世界史を通して学ぶ多角的思考
	国立	筑波大学附属聴覚特別支援学校	二年	渡辺彩愛	彩り豊かな世界
	県立	東葛飾高等学校	一年	近藤佳奈	飽きることのない並行世界で生きる
東京都	私立	恵泉女子学園高等学校	一年	橋本奈都	「カラフル」なわたし
	国立	筑波大学附属桐が丘特別支援学校	一年	齋藤花凜	夢の欠片で未来を創る
	都立	田園調布高等学校	二年	加賀谷 祈	「命の記憶」に教えられた私の生きる意味
	私立	東京農業大学第一高等学校	三年	鈴木ももか	シンパシーとエンパシー
神奈川県	私立	青山学院横浜英和高等学校	二年	倉方菜瑛	「大切なもの」に出会う旅
	市立	川崎市立川崎総合科学高等学校	三年	百瀬 楓	「生物」がいる世界
	私立	聖セシリア女子高等学校	二年	エレンズ華那	ナス
	私立	聖セシリア女子高等学校	二年	竹内 葵	幸せの定義
新潟県	私立	新潟清心女子高等学校	一年	北村一乃	身近にもあったカラフルな世界
	私立	新潟清心女子高等学校	一年	渡辺瑚子	絵本から学ぶこと
	私立	新潟清心女子高等学校	二年	山下紗也華	言葉の教科書
富山県	県立	高岡南高等学校	二年	高野明里	悩む⇨楽
	県立	砺波高等学校	一年	明瀬雛乃	自分を貫く
	県立	砺波高等学校	二年	本田真珠	田舎県田舎市田舎地域の未来と私
	県立	富山中部高等学校	二年	富永彩愛	人生を変えた言葉
石川県	県立	金沢桜丘高等学校	一年	織田 心	私と光夏とあふれる光
	県立	金沢西高等学校	二年	太田菜亜	「死」と「友情」
	県立	金沢二水高等学校	一年	稲吉真理奈	「生きる」こと
	県立	金沢二水高等学校	一年	中川和奏	人生で大切なこと
福井県	県立	武生東高等学校	一年	上野芽依	私の「あしあと帳」
	県立	藤島高等学校	一年	宇佐美涼奈	孤独への沈潜
	県立	藤島高等学校	一年	宮西陽菜	愚かな人間⇨最も怖い人間
	県立	美方高等学校	三年	岩本まひろ	就職活動と大学受験
山梨県	私立	山梨英和高等学校	二年	長田友唯	自分の弱さを見せる
	県立	吉田高等学校	一年	小宮大和	「のび太」に学ぶ生きかた
	県立	吉田高等学校	二年	天野亜衣子	鼻毛、出てますよ

	県立	吉田高等学校	二年	柏木佑月	たいせつにするとは
長野県	県立	上伊那農業高等学校	三年	北原涼香	未来をつかむ
	県立	中野西高等学校	二年	高田莉帆	幸せのベクトル
	私立	松本第一高等学校	二年	太田彩加	願いと後悔
	県立	屋代高等学校	一年	西村沙都	当たり前ではない日々
岐阜県	県立	岐阜北高等学校	一年	岡崎優実	視野を広げる
	県立	岐阜北高等学校	一年	松代咲月	他者
	県立	岐阜北高等学校	二年	太田小遥	報われない事
	県立	不破高等学校	二年	尾崎 麗	生命の連鎖の中で
静岡県	私立	静岡聖光学院高等学校	三年	高橋芳鳳	コロナ禍の記憶と芸術
	県立	富士高等学校	二年	小長谷菜穂	あなたへ
	県立	富士高等学校	二年	林 なつみ	哀と姫君
	県立	藤枝東高等学校	一年	大石萌恵	「このあたり」を見る
愛知県	県立	一宮興道高等学校	二年	高原佑紀	明日が当たり前に来ると思うな!!
	県立	天白高等学校	一年	竹内いろは	あと一歩を踏み出す時に
	県立	豊田工業高等専門学校	二年	本田萌亜	表情を作り出す
	県立	豊橋東高等学校	二年	笹原とわ乃	大切なものが消えた世界から学んだこと
三重県	私立	鈴鹿高等学校	二年	田中乃瑛	出会わなかったら：
	国立	鈴鹿工業高等専門学校	一年	中川洋美	明日の私が輝くために
	国立	鈴鹿工業高等専門学校	三年	辻 美空	「自分が戦える道」を探して
	私立	セントヨゼフ女子学園高等学校	二年	江藤愛莉	たったひとつの尊い命
滋賀県	県立	安曇川高等学校	二年	山口奈都子	私たちはイエローで何色だ
	県立	高島高等学校	一年	保木 華	私の心を開いた本
	県立	高島高等学校	二年	岩谷咲希	幸せとは
	県立	高島高等学校	三年	藤橋小梅	与えることは最高の喜び
京都府	私立	京都女子高等学校	二年	角 倫彩子	苦い過去
	府立	嵯峨野高等学校	二年	原田香子	人間の持つ責任
	私立	洛星高等学校	一年	計良直哉	音楽と理想
	私立	立命館高等学校	一年	末広愛依	「生きていた証」とは
大阪府	市立	大阪市立高等学校	一年	菊池優吾	『カエルの楽園2020』から思うこと

	市立	大阪市立高等学校	二年	松本涼花	魔法の言葉「アイ・ノウ」
	市立	大阪市立大阪ヒジネスフロンティア高等学校	三年	土田真実	「食べる」ことへの感謝
	市立	大阪市立南高等学校	一年	根来実結	物の見方で動く心
兵庫県	私立	小林聖心女子学院高等学校	二年	後藤理乃	アイとの成長
	私立	賢明女子学院高等学校	一年	平山百夏	弱さを強さに
	私立	甲南高等学校	一年	堀木田結柊	景色を添えて
	県立	姫路西高等学校	一年	吉田愛菜	感性と生きる
奈良県	県立	畝傍高等学校	一年	木村詩音	「当たり前」という名の幸せ
	県立	畝傍高等学校	一年	秦泉寺あかり	私がいいたい人
	県立	畝傍高等学校	二年	川上真優	見つめ直すことから
	県立	高田高等学校	一年	大田 茜	自分らしく
和歌山県	県立	田辺高等学校	二年	江川梨菜	看護の現状と重要性
	県立	田辺高等学校	二年	濱口杏花	一冊の本で広がる考え
	私立	智辯学園和歌山高等学校	一年	木下開夢	数学の青春
	私立	智辯学園和歌山高等学校	二年	嘉藤稜士	朝日が昇る
鳥取県	私立	青翔開智高等学校	一年	芳賀道朗	共感と享受で思考を刺激する本
	県立	鳥取西高等学校	一年	小林綾菜	目的と道
	県立	鳥取西高等学校	一年	山根涼葉	新しいジブン
	県立	米子東高等学校	一年	井上咲南	響きに包まれて
島根県	県立	出雲農林高等学校	三年	三上美愛	牛とともに
	県立	大社高等学校	二年	今岡琉渚	誰かの靴を履いてみることに
	県立	益田高等学校	二年	両見菜央	私と震災
	県立	矢上高等学校	一年	坂根彩華	二度出会った本
岡山県	県立	岡山朝日高等学校	一年	細川紗菜	私が勉強し続ける意味
	県立	笠岡高等学校	一年	加藤こころ	心の束縛から解放されて
	県立	倉敷天城高等学校	一年	松尾明夏	わたしのままで生きる
	県立	倉敷青陵高等学校	二年	安延穂香	絶対
広島県	県立	海田高等学校	一年	稲田 陸	「物が無くなる」とは
	県立	呉三津田高等学校	二年	高重晴基	発見
	県立	広島観音高等学校	二年	阿波さくら	私と言葉と生きる場所

	私立	広島文教大学附属高等学校	一年	三瀬みづき	数学の美しさ
山口県	県立	熊毛南高等学校	一年	酒井日菜乃	絡まったイヤフォン
	県立	熊毛南高等学校	一年	森下凜桜	みなさんは命を大事にしていますか？
	県立	下関西高等学校	一年	弘中晴菜	死と向き合う
徳島県	県立	萩高等学校奈古分校	一年	古谷澄美音	日常に潜む落とし穴とは
	市立	徳島市立高等学校	二年	栗本美穂	地図に「夢」をのせて
	私立	徳島文理高等学校	一年	高橋美優	言葉にすること
	県立	富岡東高等学校	二年	近藤麻結	死を越えて遺るもの
	県立	脇町高等学校	一年	高田真歩	みんなカラフル、みんないい
香川県	県立	高松高等学校	二年	三枝 馨	山椒魚と世界
	県立	丸亀高等学校	一年	宮武孝匡	成熟した日本人になるために
	県立	丸亀高等学校	二年	齋藤光莉	亡き祖父を想って
	県立	丸亀高等学校	二年	高橋れみか	幼年時代の輝き
愛媛県	県立	宇和島東高等学校	二年	山口由衣	リングからのメッセージ
	県立	松山西中等教育学校	五年	河合克真	「違い」を許さない社会
	県立	松山東高等学校	三年	稲葉文花	首のまわりにあるもの
	県立	八幡浜高等学校	二年	津田采音	普通とは
高知県	市立	高知市立高知商業高等学校	二年	大野菜乃	あるがままの自分を愛すること
	県立	高知農業高等学校	三年	竹本万桜	嫌な場所から逃げてもいいよ
	県立	高知農業高等学校	三年	西邨多未	農業の力×農福連携×
	県立	嶺北高等学校	二年	百崎あい	本と自然が好き
福岡県	県立	修猷館高等学校	一年	先崎萌梨	私の教科書
	県立	筑紫丘高等学校	一年	中島爽一郎	「人」という恐怖
	県立	福岡高等聴覚特別支援学校	一年	石河大地	国岡鐵造の生き方から
佐賀県	県立	門司大翔館高等学校	二年	守田陽風	ペストとコロナの影響
	県立	鹿島高等学校	二年	平川陽菜	長い道のりの途中
	県立	唐津東高等学校	二年	内田真納子	アンネ・フランクを友として
	県立	唐津東高等学校	二年	佐伯すみれ	なりたい自分
長崎県	私立	佐賀清和高等学校	一年	江上朋花	温かい死
	県立	桜が丘特別支援学校	一年	岩崎衣織	彼らは「火花」

	私立	純心女子高等学校	一年	渡海七美	勇希
	県立	長崎南高等学校	二年	松尾日菜	『プレイブ・ストーリー』を読んで
	県立	猶興館高等学校	二年	石田愛佳	エンドロールの証明
熊本県	私立	九州学院高等学校	一年	磯田大翔	僕と青年と哲人の部屋
	市立	熊本市立必由館高等学校	二年	元田紘太郎	本は人に寄り添う
	私立	熊本信愛女学院高等学校	二年	古川桜子	『三月の雪は、きみの嘘』を読んで
	県立	高森高等学校	二年	後藤乃枝瑠	少しの勇氣
大分県	県立	大分上野丘高等学校	一年	賀来優花	私たちの「生命」について考えたこと
	県立	杵築高等学校	二年	河野朱里	飢餓への罪悪感
	県立	芸術緑丘高等学校	三年	藤内花恋	廉太郎の音をたどって
	私立	昭和学園高等学校	三年	阿部月香	誰かのきっかけになる
宮崎県	私立	聖心ウルスラ学園高等学校	三年	田村鼓莉	日常を歩む人生
	県立	都城泉ヶ丘高等学校	一年	治田颯希	明日がある「幸せ」
	私立	宮崎学園高等学校	二年	黒木心葉	時代を越えた架け橋に
	県立	宮崎南高等学校	一年	浜田遥可	自分らしくあるために
鹿児島県	国立	鹿児島工業高等専門学校	二年	森山滉平	プレゼン
	県立	武岡台高等学校	二年	前田音寧	心の「マスク」を外して
	県立	鶴丸高等学校	二年	児玉史織	苦難の中でこそ
	県立	鶴丸高等学校	二年	永山莉子	日々挑戦
沖縄県	県立	開邦高等学校	一年	風岡優衣	高みを目指して
	県立	開邦高等学校	二年	新垣英玲奈	「私の忘れ物」は無いかな？
	県立	向陽高等学校	三年	金城鈴乃	寄り添うということ
	県立	向陽高等学校	三年	津波さくら	アイデンティティにさまよう

中央入賞者8名の受賞作品、および優良賞受賞者・入選者の氏名・学校名などは、「一ツ橋文芸教育振興会」のホームページに掲載されます。(1月下旬予定)
<http://www.hitotsubashi-bks.jp>